

# 新農人語り実会

## 輸入自由化と日本農業

— 在村農民は語る —

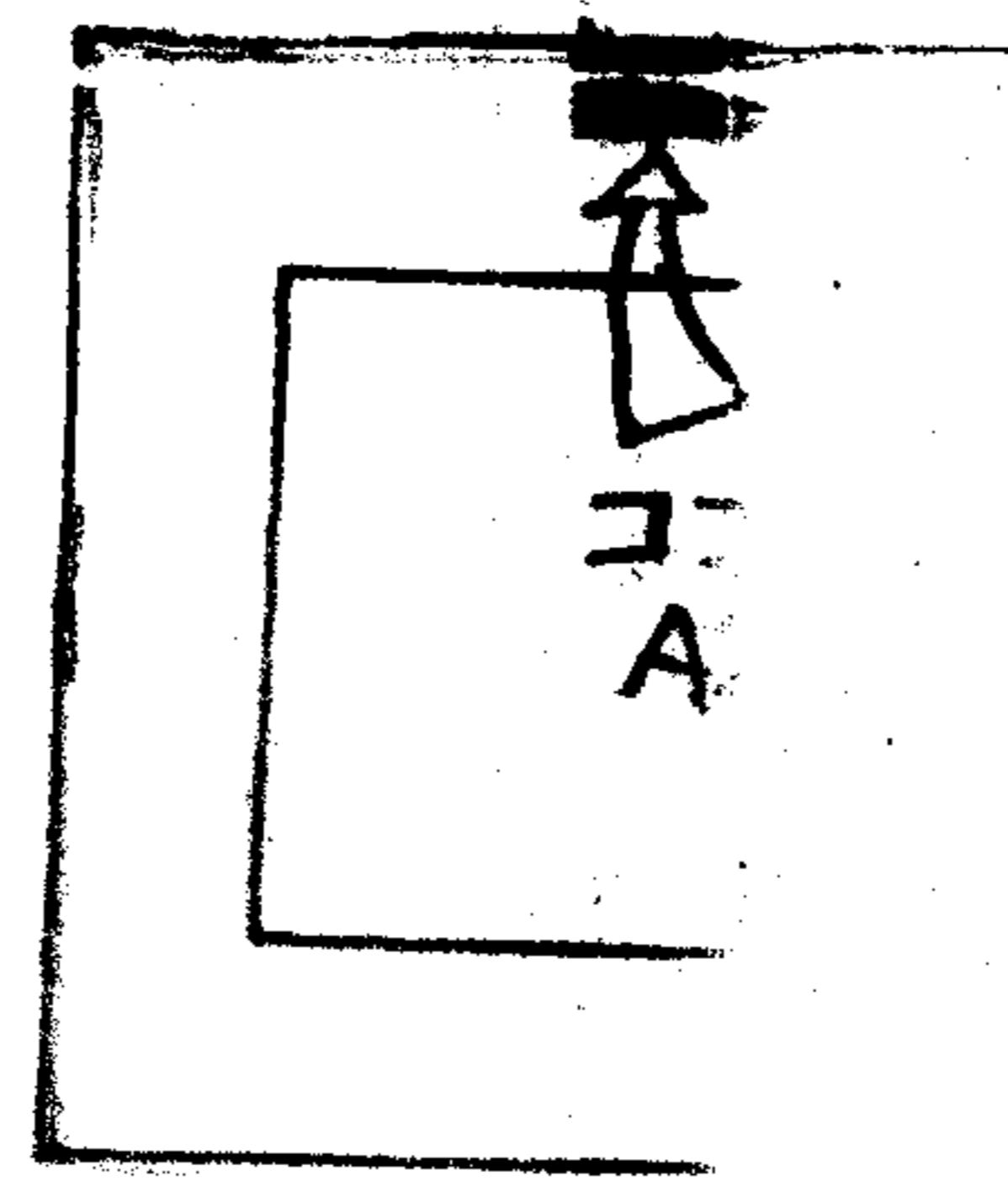
講師：

日時：4月22日(火) PM 4:30~

会場：教養部 A219教室



会場



主催 農政問題研究会

を取らざる事無。昨年の「日本共産新聞」には「米国の農産物輸出の最も豊かな單一の輸入となつた日本と、日本の最も豊かな單一の供給国となつたアメリカ」と述べられ、米田の萬能の間では異なる日本農業の圧殺が決定したのです。アメリカ国内では日本への輸出の為、六三〇万haもの農地が利用されたり、輸出を削減することによる国家的損失です。

一方、日本側にしてみれば安全保障の問題上これ以上の輸入は絶対避けねばならぬことは、です。食糧輸入がとどいたら數千万人の餓死者が出るのですから。食糧が第三の武器となるばれる由縁です。折も折、ソ連のアフカニスタン侵攻以後、アメリカは対ソ農産物輸出を

スリップし、余剰農産物を日本に押しつけようとしています。しかも日本政府は動搖的です。これが日本農業にとっても大禍があり、ここにこそ日本の農業問題の眞摯な核がある。すなわち、わが国が田畠・黒雲が築かれて、私が米国の貿易赤字改善のためますます強まる輸入農産物の圧力を排除するが、あるいはこれに屈服するかです。

#### 講演会に参加しよう

戦後農政がこうで、現状がこうだからといへて、私達は單なる農林省の政策に反対していればいいところでもあります。また、日本農業のがんは多額農民が土地を手離さないことにだとする人達の意見も、これまでの農

#### はじめに

新入生の皆さんへ學生の皆さんへ

春四月、桜の花も真盛り。自然界では悠久の法則通り、全ての生命が活々と動きはじめています。「年々歳々花相似」。農村においてもあちこちで苗代の準備や種播の作業が今行われようとしています。天然の懷で催される人類の行事です。しかし農業というのは、自然の運行にのみ左右されるものではありません。春夏秋冬は変化せずとも、人間社会の嗜みは常に転換し、新しい社会が生じています。農業もまた、そういう社会の中で農業です。そのための分説をしようということと自体、既

に抜けたことなのでしょう。それならば改めて、農業（農林水産業）を一つの産業として捉え、日本とこう社会の中で日本農業を客観的に理解するることは大いに必要だということになります。なにぞどうか。

#### 今、日本農業は

現在の日本農業にかかる状況は混沌を極めており、危機に瀕してゐることを玉ます。テレコのロマーシャルでは、一日百万円もある農業機械がやたらと登場してからにも優稚な田園風景が見しだされる。ところがその実際において機械化競争が発生する。日本農政のもとで多くの犠牲者が亡くなり、これがどうす。東北においては一連の生産調整(減反改

（）の中でも多くの自殺者を出しておおり、秋田県では、年に十万人の出稼者が出て、数万人の者が事故で死んだり、病気やけがに罹ります。れていたり。また年に五百人の出稼が農民が蒸発したと言われています。

戦後史をさかのぼって、55年に出された農業基本法が精銳の生産農民を保護し、バラ色の日本農業を描いたのとは裏腹に、出されたのは、農村を追われた安価な労働力と、農地を埋めた工農用地を手にした工農資本の競争ではなく、たのむのです。そうしてこの結果は、農村の多面化が進れます。勿論ここで延長に今日の多面化が進ります。勿論ここで農業と工業を対比させ、どちらかをエッセンスにしてようとするのではなく、一つの自

れだと思つや、今日の新生産調整が55%の反が二の村に課せられています。その「強の田農政の結果はどうだったでしょう。結果は、につちもやつちもいかなくなつた減反・減収の生産抑制が、魅力のなくなり農村が殘るばかりです。農林省が農業振興を図つたけれども、「高吸ほど疎らす」だったのがほほい。まさにこの結果こそ日本農政の一貫した基調だったのでです。

### 農業をどうまく情勢――

農業が社会の中で果たす役割の中でもっとも大きなものが食糧の供給であり、産業としてみた場合には農業の生産物は食料品に限定されます。ところが今日の日本農業にはこの

正当な地位さえも与えられてこません。日本の食糧供給は、自給率がわずか30%、残りの70%は輸入農産物に依存してくるのです。  
高度経済成長時代に、農林省は食糧生産に変わったと言されました。鶴陽農業として国内麦が排除され、変わりに外麦が大量輸入されました。また、成長産業と指定された畜産業に向けて、卵・肉・牛乳と家畜の養育を生産する飼料が外国から買いつづかれました。現在その数量は小麦六〇〇万セント、飼料の国内生産量は一一〇〇万セント

一五〇〇万セントに到つてこます。（ちなみに米

法以後の一連の農政――鶴谷農政・水田利用再編計画・生産調整等――をするながら、総目的な企業資本が農業操縦の上にあぐらをかいてくることの構造には変化ありません。しかし、今日の日本農業を見るとき、こうした農政とその実態を問うことよりも農業政策の変わす。日本農政が、その場その場で方法の変わることの「鶴の四農政」と呼ばれて久しく、ハ筋湯を干すし、大農場経営の大潟村がおこなやはさ

政の敵を隣るものに他なりません。一つ重要なことは、これらがやはり農民自身の問題だということです。農民にとって、農産物を生産するという実践と同様に、生産を可能にする状況を切り拓くといふ実践は重要なことです。そういう意味で、私達は農業の問題を農民と共に考えねばならないでしょう。しかし私達はその点に関してあまりにも無知です。共に考える一つの試みとして、私達はこの講演会を準備しました。皆さん、とりわけ、若い新入生の皆さんがこの講演会に参加され、農業問題に関する話をされるように訴えるものです。

京大農政問題研究会

連絡先：

東部方 田中まで